

WAYプロジェクト（校内道德教育推進委員会）レポート

2019・10/18（金）

神戸大学附属中等教育学校 授業（P4C）見学の感想

レポート 高砂

10月18日（金）に、本校での「哲学対話」の実施に向けて、兵庫県の神戸大学附属中等教育学校に、市議会議員の齋藤さん、株式会社イミカの原田さんと共に視察に行かせていただきました。附属中学の中川先生が国語の授業で行われている「P4C（Philosophia For Children の略）」という取組が、「哲学対話」に近い、語り合う授業ということで、実際に生徒たちと混ざって授業にも参加させていただきました。



自分の考えを語り合う授業「P4C」

「P4C」とは、授業で使用した教材や自分の経験をもとに、子どもたち自身がテーマを設定し、そのテーマについてクラス全員で話し合い、語り合う授業です。見学に行った際のテーマは「いじめっ子ってどんな気持ちなんだろう？」「『ごめんさない』と『すみません』の違いってなんですか？」「学生が恋をする必要はあるのか？」の3テーマ（各クラスで1つのテーマ）で、過去には「入学試験は平等？」や「サンタクロースはいるのか？」などのテーマでも行っているそうです。クラスによってテーマも様々でした。

P4Cの進め方

授業では、生徒たちは輪になって座ります。そして、「コミュニケーションボール」というボールが用意され、意見や考えを発表する際には手を挙げ、そのボールを受け取った人が発言できます。ボールを持っていない人が口々に発言するのは禁止されています。手を挙げた人が優先ですが、手が挙がらない場合は、他の誰かにボールを渡します。ただし、発言は強制ではないのでパスも可能です。

哲学対話に向けてみえた課題

- ・授業を見ている中で、発言する生徒の偏りがみられたクラスもありました。40人クラスでは、1時間を通してボールを受け取らない生徒もいて、全員が発言しているわけではありませんでした。また、積極的に発言する生徒と、発言せずに聴くことに徹している生徒とに二極化されたクラスも見られました。(中川先生によると、1学期から始めていくと、2学期頃からそういったことが起こってくるそうです)

哲学「対話」において、聴くことはもちろん重要ですが、聴くだけでいいのかということについては大正中学校でもしっかりと考えないといけないと感じました。また、全員が対話に参加するための工夫やテーマ設定の工夫も重要だと思います。

- ・自分の考えや授業を通して自分の考えがどう変わったのかを書くプリントが配布されるので、発言できなかった生徒の考えも先生が確認できたり、生徒同士でお互いに確認し合ったりできるよう工夫がされていました。
- ・中川先生は、司会として話し合いをうまくまわしていくというよりも、終始生徒たちの意見を聴くことに徹しておられました。中川先生の立ち位置は、「議論が深まるようなサポート」をする役割であったように思います。議論が煮詰まってきたら、出てきた意見の整理をする〔生徒の頭の中の整理〕。議論が広がっていく中で、教室の意見が固まってきた時に別の視点を追加する〔別の考え方を追加する〕。といったように、基本的には聴くことに徹しながら、必要な場面においては、発言をされているという印象でした。そういった意味でも、哲学対話においてファシリテーター（進行役）の重要性を強く感じました。
- ・「P4C」の取り組みによって生徒たちにみられた変化については、語り合うことを通して生徒同士の仲が深まったと感じるそうです。この点については、本校でも「集中HR」や「一声」などの取り組みを行っているので、十分にできると考えます。ただ、学校全体で取り組むことの難しさがあるようですが、昼休みなどに生徒たちが中庭に集まって、有志で「P4Cで語り合う会」をしているようで、そこには上級生や高校生も参加しているようです。生徒自身が語ること・聴くことをおもしろいと感じている雰囲気がありました。本校での実施については、校内でどのように研修していくのかも含め、学校が一枚岩となって実施していかなければいけないと感じました。

